



超満員のトーンハレ、バルトリ・コンサートツアーより

10月10日に予定されていたコンサートツアー・オープニングコンサートは急病のため12月1日に延期されたものの、ステージ上にまで50席以上も椅子を並べるという超満員のチューリヒ・トーンハレであった。ツアーは、CDを共に録音したイル・ジャルディーノ・アルモーニコの他に、バーゼル・シンフォニエッタと、今回聴いたラ・シンティッラの3つのオーケストラと共演するので、その音色の違いも楽しめる。ナポリ郊外のカゼルタで開かれたラウンチパーティでは、“ジャルディーノ”が限りなくバロック的でありながら、濃厚でドラマチックな音楽を聴かせてくれたのに対し、より透明な北ヨーロッパらしい音の中で、バルトリの声が研ぎすまされて聞こえた。マシガンのようなコロラトゥーラは、超人的で驚かされるが、芸術的に圧巻なのはやはり、〈私は出立する〜〉、〈恋をしている蝶々のように〉、〈妻よ、私が分らぬか……〉などの、ピアノシモにこめられる心の奥からの叫びの歌であろう。そして必ず、メランコリックな曲の後では、〈私は落ちるだろう〜〉のように、歌の中に遊びの要素を入れ、口を開けたまま、音をブツと切ってみせたりして笑いを取るのが彼女のセンスだ。

そしてチューリヒの聴衆は、マントを翻して登場した男装のバルトリを笑いと共に迎え、最後にスタンディングオベーションに至るまで、ずっと温かく支えており、「コンサートは聴衆と共に作り上

Scramble Shot

げるもの』と語ってくれた言葉を今回も
実感できた。ホールを後にし、ふと時計
に目をやると、開演から丸3時間が経過
していたのが信じられないような濃密な
時間であった。(中 東生)

